慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パルメニデス篇について
Sub Title	
Author	星野, 重顯
Publisher	三田哲學會
Publication year	1931
Jtitle	哲學 No.8 (1931. 8) ,p.189- 214
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000008-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パルメニデス篇について

星野重顯

一、イデアについての諸意見

アリストテレスが形而上學第一卷[一]に於てプラトンのイデアを説明して、感覺的事物の外に、之を隔離して存在する事物的實在として以來、十九世紀に至る迄、此の二世界的見解はイデア解釋の唯一のものと考へられてゐた。然るにロッチエ、カント[二]はアリストテレスの解釋とは全く異つて、プラトンのイデアを解釋して、新しきイデア解釋への一大光明を與へた。

ロッチエは彼の「論理學」[三]に於て實在 Wirklichkeit なる概念を討驗して、第一に有る物 Ding, welches ist をば無き物 Ding, welches nicht ist に對して wirklich であると言ひ、第二に起る出來事 Freignis welches geschieht を起らぬ出來事に對して Wirkilich であ

ると言ひ、第三に成立つ關係 Verhältnis, welches besteht をば bestehen しない關係に對して Wirklich であると言ひ、第四に妥當する所の命題 Satz, welches gilt をば Gelten しない命題に對して Wirklich であるとなした。之の實在の四つの形式は決して混同されるものではない、例へば命題―妥當なる場合を考へるに、命題は物の樣に有るのでなければ、又出來事の樣に起きるのでもなく、關係の如くに成立するものでもなくて只妥當するのみである。而して此の妥當が何を意味してゐるかは他の三よりは導き出されない。而してプラトンのイデア界は之の妥當の世界に外ならぬ、とロッチェは考へた。プラトンの考へではイデアはアリストテレスの認めた形而上的實在ではなく、外界の物にも、認識する吾々の精神の有無にも關係なく、永遠不變の意味と妥當とを有するものである。かくてロッチェは物の如くに有るのでもなく、出來事の樣に起るのでもなく、關係の樣に成立するものでもないで、而も物や出來事を支配する一般的眞理の存在する事の發見を以つてプラトンの偉大なる哲學的功績となした。此のロッチェに依つて開拓されたプラトンのイデア解釋を發展させた學者に Dieck (Untersuchungen zu Platonischen Ideenlehre, Naumburg.

1876)があり、又獨自の研究を以つてロッチェに近寄つたものに Tennemann (System der Platonischen Philosophie. 4 Bde Leipzig, 1792) と Lutoslawski (The origin and growth of Plato's logic, London, 1905) があるが、最も有名なるは Notorp (Platos Ideenlehre Leipzig. 1921) である。ナトルプはイデアを die Methodenbegriffe der Erkenntnis と考へた。ナトルプとロッチェとの見方の相違は存在の最高の種をロッチェは法則一般と考へ、ナトルプは判斷作用の存在と考へた點にある。ナトルプの見方は主としてパイドン篇を基にしてゐる。(四)

かゝる妥當說に對して力强く反對して立つたのは偉大なる哲學史家ウインデルバンドであつた。彼はアリストテレスや古代中世のプラトン主義者が主張したる二世界主義を奉じて、イデアは知覺的物體世界と並んで獨特なる高き世界を築くとなして、ロッチェの解釋の如きは大なる曲解であつて歷史的プラトンには緣なきもので、巧妙にもプラトンのイデアを妥當するものとなし、カントに依つて開拓されし近代認識論的思索の下に走り、永くプラトン主義を生そうとするものであるが、之は歷史的無理解の最も甚しいものである。と反駁した。(五)

ウインデルバンド門下のBruno Bauchは乍然師説に反對してアリストテレスのイデア解釋の誤れる事を主張して、その據つて來る所はアリストテレスがプラトンの數學を考へてゐなかつたにあるとなして、その例をフヒテとシェリングの關係に取つて説明した。(六)

アリストテレスのイデア解釋を正しきものとして、かゝる新説に對して力强く反對する學者に尙ジャックソンを忘れる事は出來ない。彼はプラトン晩年の著作の研究の結果イデアを典型的 Paradeigmatic イデアであると斷定し、然も只 ἐν φύσει ὄντων として承認した、之に反して artefakt や關係のイデア措定はプラトン初期の説に屬すると考へた。(七)

古代哲學史家なるチェラーはかゝる二世界主義を奉ずる一頭目である。彼はイデアの物質的解釋を固持して、イデアは物自身の本質であつて、物の本質の觀念ではない。(八)プラトンに於てはイデアに對して二種の規定が見出される、之等は常に交錯して用ひられてゐる、卽ち Ontologischen と Ätiologischen との意味に取られ、イデアは現象への關係に於ける原型として、又作用する力として考へられる。(九)

かゝるイデアの總括的理解と並んで尙重要な問題が生じて來た、卽ちプラトンの思索に於けるイデア論の發生の研究である。此の場合プラトン對話篇の順序が重大なる役割を演ずる事になる。發展の見地に依つて初めてイデアを原理的に考察した最初の人はリビング[一〇]であつた。後ルトスワフスキー[一一]が之に加つたとは言へ未だ完成されたものとは言へない。

(一) Aristoteles: Metaphysik. 986 b.
(二) Kant: Kritik der reinen Vernunft. Reclam, 275. 277. 275. anm.
(三) Lotze: Logik 493.
(四) Natorp: Platos Ideenlehre: 196.
(五) Windelband: Geschichte der Philosophie, 97—98.
(六) Bruno Bauch: Das Substanzproblem. 217 ff.
(七) Jackson: Plato's later theory of ideas (Journal of Philology X, XI, XIII—XV.)哲學研究第十二卷一〇六九—一〇九六　一一九一—一二〇五。
(八) Zeller: Philosophie. d. Gr. III. A., II. I, 561.
(九) 〃　: Berliner Sitzungsber. 1887.. S 211.
(一〇) Ribbing: Genetische Darstellung der platonischeh Ideenlehre.

（一一）W. Lutoslawski: The origin and growth of Plato's logic.

二、パルメニデス篇中の青年ソクラテスとパルメニデスについて

パルメニデス篇中第一部とも見なされる、プラトンのイデア論をなせる主要なる人はゾェノン、パルメニデス及び青年ソクラテスの三人である。ソクラテスは他篇とは根本的に異つて青年として現され、從つて常に他篇に於て優位にある彼が未熟な思想の所有者として書かれてゐる。他の對話篇に於て常に相手の缺點を認めて對者をして所謂思想「出産の苦」に陷入れて來たソクラテスは、反つて此篇に於ては自からのイデア論を述るに當つて、到る所でパルメニデス及びゾェノンに依つて反駁されて、自からが「出産の苦」に陷つてゐる。ファイドン篇[1]に於て自からして未熟なる者の思想出産を助くる産婆であると自稱した彼は、此篇に於ては自分は産婦となり、パルメニデスが産婆の役を演じてゐる。かくの如く對話者の役割上に於て他篇と異るのみならず、その内容の方面に於ては、全く此篇のプラトンに依

つて書かれたか否かの眞僞を疑はしむる程に、所謂プラトンのイデア論を論破してゐる。然しながらパルメニデス篇の眞作なる事はその用語の研究、文體の研究に於ても又その内容の研究に於ても諸學者の一致してゐる所であつて、プラトン研究上重要な史料たるを失はないものである。諸學者の一致する所に依ると第二シシリア旅行の最中にしてプラトン六十一二歲の頃、對話篇の順序としては、プラトンの諸對話篇を Socratic Group, First platonic Group, middle platonic Group, Latest Group, の四期に分類する Stewart[2] に依れば、三期卽ち中期の最末端に位して、後期の諸篇に對する橋となつてゐる、而してテアエテトスの後、ソプィステスの前に置かれてゐる。

も早プラトンの思想も圓熟した此期に於て彼がパルメニデスを書き常に自分を代表せしめてゐるソクラテスを劣位に置いて、イデア說を主張せしめ、パルメニデスをして再び立ち得ない程の反駁をなさしめてゐる此篇はカフカ[3]やゴンペルツ[4]の考へる樣に、自分自からのイデア論の自己批判と考へられるかどうか。問題は對話篇中のソクラテス及びパルメニデスの役割を考へる事に依つて決定する。

然らばソクラテスの役割は如何なるものであらうか。若しソクラテスがプラトンを代表してゐるものと考へるなれば、プラトンは之以後の對話篇、卽ソフィステス、ポリティコス、ピレボス――之等の五篇に於てもイデア論をプラトンは展開してゐる――を書きはしなかつたと考へられるし、又パルメニデス篇そのものを書きはしなかつたと考へられる。何者パルメニデス篇中に於てはイデア論は維持し難い迄に論破されてゐるから、捨つべきものなれば潔良く捨てゝ了つてゐると考へられる。されば青年ソクラテスはプラトン自身でない。かく迄極端に言はずともペリー[5]の言へるが如く少くとも共和國やプアイドンに於けるプラトンとは全く異つてゐる。然らばソクラテスは何人を代表してゐるであらうか。パルメニデス前半に於てイデア論を反駁する內その最も有名にして、又有力な議論は τρίτος ἄνθρωπος にある。然に此の「第三の人間」はアリストテレスが Metaphysik A. 9. 990 b 17. に於て論及してゐるものである。そこでプラトンはソクラテスにアリストテレスを代表せしめてイデアを「第三の人間」なるアポリアに陷入れてゐるものであらうか、とも考へられる。然し此の「第三の人間」は決してアリストテレスに初つて

ゐるのではない、アレクサンドロスが Metaphysik に註した所に依るとポリュクセノスに依つて利用され、プラトン自身も共和國第十巻597Cにて認めてゐる所である。從つてアリストテレスをソクラテスに代表せしめて、ソクラテスの論理をたどつてゐるとは考へられない。[6] 之の事は年代的に考へて見れば不可能な事でなければならぬ。然しアリストテレスはパルメニデス篇に於てソクラテスが主張したイデア論をプラトンのものと解して「第三の人間」の缺點を指示してゐる、プラトンの偉大なる弟子アリストテレス――プラトンとは性格は甚だ異つてゐる――ですらかくの如きものとしてイデアを解したとすれば他の多くの弟子は如何であつたであらうか。全々理解し得なかつたものは問題にはならぬが、誤り解してイデアを物の如くに考へた者が多かつたであらう。プラトンは此等イデア論を誤解した弟子等をソクラテスに代表せしめたのではなからうか。かくて青年ソクラテスは意義あるものとなる。

青年ソクラテスをかく考へればパルメニデス、ゼノンの代表するものは何んであるかは明にされる。ナトルプが[8] パルメニデス、ゼノンは眞のプラトンの考へを

現してゐると言つてゐるのは正しいものである。

かくの如く青年ソクラテスにプラトンの弟子を代表せしめ、パルメニデスにプラトン自身を代表せしめる事に依つて初めてパルメニデス篇前半のイデア論は明にされ得る。

パルメニデス篇がアリストテレスのイデア論への反駁に對して書かれたと主張する學者は全々年代を頭に置いてゐないものである。アリストテレスがアテンに來たのは年十七歳であつて、その後間もなくパルメニデス篇は書かれてゐるのであるから、若しアリストテレスに對して書かれたとするとプラトン程になくとも少くともプラトンに近い學者でなければならなかつた筈であるが、そうは考へられない。勿論アリストテレスもプラトンのイデア篇に不案内であつた一人の弟子として、パルメニデス篇作製の一對象ではあつたであらうが、アリストテレス一人が對象ではなかつたと考へられる。

アリストテレス、パルメニデス、ソクラテス、プラトン當時アテンに於ける會合せる年齡については、Ast. Plato's Leben und Schriften, Leipzig. 1816. S. 247 を見られたい。

1) Symposium.

2) Stewart. Plato's doctrine of Ideas P. 15.

3) Kafka, Sokrates, Platon und sokratische Kreis, S. 93.

4) Gomperz. Greek thinkers. vol. 3. P 150.

5) Bury. The later platonism, in Journal of philology. VOL. XXIII. No. 46. 1895.
6) Lutoslawski. The origin and growth of Plato's Logic. P. 401.
7) Natorp. Platos Ideenlehre. P. 220. 223.
8) Nrtorp a. a. O. 308.

三、パルメニデス前篇 (130A—135C)

パルメニデス篇は判然と二分する事が出來る。その前篇はこの對話篇の骨子ともなるべきものであつて、プラトンのイデア說に對して六つの批難をなしたものである。前篇の內容は簡單に言へば次の如くである。有名なゾェノンの逆說「多の存在は不可能である」に續いて青年ソクラテスは之の命題の基づく所の困難(アポリア)は物がイデアに μετέχειν 干與する事に依つて片づけられるとなしたに對して、老パルメニデスは物のイデアへのかゝる干與は不可能なる事を論じてゐる。

先づ之の對話篇の出發點をなしてゐるゾェノンの命題を考へて見るに存在するものには、それが多であるとすれば矛盾せる規定が屬しなければならぬと云ふ事に倚つてゐる。例として取り出された規定は性質のもの、卽ち似と、非似であるが、

之に對してソクラテスは困難は全く他に求むべきであると主張した。存在するものに同時に異つた賓辭が屬するのは、存在するものが、時々のイデアに干與する事に基づいてゐる。之は感覺世界に於て日常經驗の多く示す所である。然し誰かが互に χωρίς 分離されて置かれてゐる多くのイデアが自から混じ合つてゐるのを、再び分ち得る事を證明し得るなれば、その人は大事業を成就したわけである。(二二九E)かくてソクラテスは二つのそれ自から存在する實在世界、イデアの世界と感覺の世界とを取出した。かくて新しい重大なる困難を將來した。即ち如何にして感覺のイデアへの干與を說明すべきであるか。之の困難を持つて前篇の本論に進んだ。私は便宜上イデア論に對すパルメニデスの反對を六つに分類して說明したい。

(一)先づ最初の Deductio ad absurdum はイデアの全體か、或はそれの一部分のみが個々現象の對象に干與するかどうかのアポリアに歸する。之は兩方とも成立しない。(イ)若しも全イデアが各々の物にあるとすると、同じイデアが同時に多くの物の內にあらねばならぬ。之の事は不合理である。(ロ)若しイデアの一部分のみ

が物に干與するとすると、イデアは分割され得て、多くの不合理が生ずる。(イ)の場合に於てはパルメデスは天幕が多くの人をおゝふ例を引いた。各人は只此の場合天幕の一部分でおゝわれるのであつてその全體ではない。之と同様にイデアの分たれた部分が多くの物に干與する。之の事は次の(ロ)に於て量的に規定される不合理に導く。(イ)の場合が不合理とするとイデアが物に關與する仕方は(ロ)の場合しかあり得ない。然るに物が大なるは大自體 αὐτὸ τὸ μέγεθος の一部に關與する事に依つてである、之の大自體は一部は然し大自體よりも少でなくてはならぬ。等しい物は等自體 αὐτὸ τὸ ἴσον よりも少い所の等自體の部分に關與する事に依つて等しくなり、又小自體 αὐτὸ τὸ σμικρόν はその部分よりも大であるから、小自體は或る物よりも大であり、小自體の部分が加へられる所のものに之の増加に依つては小にされる。之の事は全く不合理である。

かくて物はイデアの全體にもその部分にも關與し得ない、物がイデアに關與する事を物的に考へる場合には決して關與の意味は説明されない。(一三〇F—一三一E)。

(二)吾々が大なるものを多く見る時には吾々は全體に等しい大と云ふ一般概念を得る之を大のイデアと信じる。乍然之のイデアと多くの大なる物とを考へれば、再び大のイデアと多くの大なる物とに共通なる大の他のイデアを考へ、かくて無限に吾は大自體を作る。之の Progressus ad infinitum はイデアは關與の働をすると吾に又現象中に δόξα の對象とされる、と言ふ點にその根據を持つてゐる。印象——之でもつて δοκεῖν とか φαίνεσθαι とかが生づるのだが——が之の事を證明してゐる。之の所に於てはイデアは現象中には求められない事以外を言つてゐない。然らざれば吾々は常にイデアの製作が必要である。之の議論は後の τρίτος ἄνθρωπος の議論とは全く異つたものである。(一三一E—一三二B)

(三)ソクラテスは此處でイデアは思惟されたもの νόημα であつて魂の中にのみ在り得るとの假定を建てた。さてパルメニデスは思惟されたものは何物かについての νόημα でなければならぬ。何物かとは凡ての場合に於て同じものとして考へられる存在物である。然し一と考へられ、常に凡に變らず存在する所の此の物はイデアであらねばならぬ。かくてイデアが νόημα であつて物はイデアに關與する

とすれば、イデアに關與する所のものは考へられたものか、或はνοῦνとして考へられないものかである。かくて之等二つながらも不可能であると論ずる。（一三二B.C.）。

（四）かくてソクラテスはイデアは原像παράδειγμαであり、他の凡ての物はイデアの模像ὁμοίωσιςであつて之の間の關係をμετέχειν すると言ひ、物がイデアに關與するのは只物がイデアに似ると言ふ事に外ならぬと言ふ。二つのものゝ類似はtertium comparationisに依つて起る、とパルメニデスは反對する、卽ち比較に使用されたイデアに又新しいイデアが生じる、類似せるものτὰ ὅμοιαは似自體αὐτὸ τὸ ὅμοιονに依つて類似する。よつて原像と模像と似てゐるのは似自體に依るのである。かくてイデアは無限に措定されねばならぬ。かくてイデアと物との關係もかくの如くには考へられない。之の證明が（二）の證明と異るのは、（二）がイデアのNebeneinandersetzungであるが後者はUeberordnungである事に依る。

（五）次にパルメニデスはイデアは絕對であるとのソクラテスの考へに論及する。イデアが絕對であり、彼等自からに依つて存在するなれば吾々の内にἐν ἡμῖνある

事は出來ぬ。相對的なイデアに關係して、個々物には關係しない。イデア「主人」はイデア「奴隷」に μετέχειν するが、イデア「主人」は奴隷には關與しない。吾々が主人なるは奴隷に關與する事に依つて主人であるが、イデア「奴隷」に關與する事に依つてはない。

知識も又相對的なものである。イデア「知識」はイデア「眞理」に關與する。然るにイデアは吾々の內にはない、從つて吾々はイデア知識を持たないわけである。然るにイデア「知識」のみがイデアを認識し得るのであるから、吾々は決してイデアを知り得ない。(一三三B—一三四B)

(六)吾々の知識よりもより完全なるイデア「知識」が存在すると考へるなれば、それは誰かに依つて、恐らく神に依つて所有される。然るに(五)に依つて明なるが如く神の所有するイデア「知識」も吾々に關與する道がない、逆に吾々が神のもつイデア知識に關與することはできない。(一三四C—E)

以上の如くにパルメニデスはアポリャを六條に別つてイデア攻擊をなした。が然しそれはイデア說を破壞せんとしてのものではなく、反つて樹立せんとして

のものであつた事を吾々は忘れてはならない。何故なれば直ぐ後に、イデアを措定する事なくしてはディアレクティケーを哲學も取り除かなければならぬ。（一三五C）と論じ、ソクラテスのイデア研究そのものを道理あるものとしてゐる。（一三六A）からである。かくて吾々はパルメニデスの批判を目してイデア論一般に對するものでなくして、誤れるイデア論に對してなされたものと解し得る。尙深く吾々はかくてパルメニデスはプラトン自身の考へに進んだものとも見る事が出來よう。それはソクラテスの方法の誤を正して、正しき假定の方法を薦めた點に於て明に見る事が出來る。

以上六項のアポリヤに依つてプラトンのイデア論は完く論破されプラトンは自說を捨てなければならぬ立場にある。然し問題は此等のアポリヤがイデア論への眞のアポリヤであるか、或は見かけだけのものであるかに依る。此處に於て吾々は再びテキストを注意深く見る必要を生じる、嚴密に言へば文字通に見る必要ではなくして、心理的に論理的に見る必要が生じるのである。

言ふ迄もなくパルメニデス篇の主旨はイデアの否定でなく、反つてそれの肯定

にある。それはイデアの否定は哲學の否定であるとの意味をパルメニデスその人もソクラテスも共に第一部の終に於て認めてゐる事で明である。（五一一B）即ちイデアの措定は哲學には缺く事の出來ぬ所のものである、が然しイデアの措定は以上のアポリアに依つて不可能であるとの岐路に立つた。然し吾々は易く以上のアポリヤが見かけだけのものであり、決して哲學を斷念するにはあたらぬものである事を知る事が出來る。少くともアリストテレス的見解を捨てゝ眞の意味のプラトンのイデアを考へるなれば的をはずれたアポリヤなる事を知る事が出來る。吾々は再び――不必要な事ではあるが――アポリヤを驗討して見よう。第一に吾々はイデアが分割され得るものとして全體と部分との關係よりイデア「大」よりも少なる部分的なイデア「大」に關與する事に依つて事物が大なるものとなるのは不合理であるとなすアポリヤに對してイデアは分割され得るものではないと言ふ事を言へば足りる。分割され得るものは大さを持ち、形を持たねばならぬ。然るにプラトンはイデアを大さや形を持つ所の存在物とは考へてゐない、從つて所謂存在するものとは考へなかつた。以下のアポリヤも凡てかゝるプラト

ン的ならざる批判者の考へたるイデアに對して作られたものである。かゝるイデア論の考へに(代表者を吾々はアリストテレスに見るのであるが)パルメニデスは――私の考へる所に依ればプラトンその人である――批判を下したのであつて、プラトンのイデアそのものでは決してなかつた。然らばプラトンのイデアは如何に解すべきものであらうか？　此處にプラトンはパルメニデスをしてプラトン的方法に從はしめて、即ち假設の方法を持つてイデアに光を將來しようと試みた。

四、パルメニデス後篇(一三五C―一六六C)

パルメニデス後篇は一の存在する時と存在せぬ時との二つの假說を用ひて論法を進めてゐる。イデア論に對しては重大なる意義をもつたものとは考へられないとしても、その內にはプラトン哲學に對して見のがす事の出來ない問題が含まれてゐる。

さてプラトンの展開した論理は要約して見るに次の如きものである。

(二) 一、は

(A)それ自身(für sich)に見て、

(一)一として、それは統一以外の何物でもないからして部分を持たず、性質をもたず、名をもたず、概念をもたぬそれは Nichts である。(一三七C—一四二B)

(二)存在するものとしては、統一以外の何物でもあり得ないし、又全體としての一は多であるからそれは多である、從つて一は相反對する性質を持つ。一は Alles である。(一四二B—一五五E)

存在する一 ἕν としての一の之の相反對する性質は瞬間 τῷ ἐξαίφνης に融合する。之の τῷ ἐξαίφνης が反對から他へ遷る Uebergangtpunkt である。(一五五E—一五七B)

(B)他への關係に於て考へて見て

(一)若し一が存在するなれば、他は全體として又部分として一であり、一になる前は unbegränzt であり、一としては begränzt である。されば一には相反する性質が屬ずる、他は Alles である。(一五七B—一五九B)

(二)若し一が存在するなれば、他は一に相反するものとして凡ての規定性質がない、何者統一なくしては全體でも部分でもないから。他は Nichts である。(一五九B—一六〇B)

(二) 非一、は

(A)それ自身に für sich に見て、

(一)存在するものとしては、それは相反する性質を有する、それは運動し、變化する、それは Alles である。(一六〇B—一六三B)

(二)存在しないものとしては、非一は Nichts であり、何等の性質も有せぬ。(一六三B—一六四B)

(B)他への關係に於て考へて見て、

(一)一が存在しないなれば、他は多であり、相反する性質を持つ。非一は Alles である。(一六四B—一六五E)

(二)一が存在しないなれば、統一 (Ganz-und Theil-Einheit)のない多は考へられぬから、多は存在しない。されば一般に Nichts である。(一六五E—一七六C)

さて此處で εἰ、εἰ ἔστιν なる ὑπόθεσις に於ける εἰ 一とは何んであるかの問題(アポリア)が生づる。プラトンは勿論此處で一をイデアとして說明したものと考へられる、之に對して多と言ひ他と言ふのは各事物を言ひ表してゐるに外ならない。かく解する事に依つて一の存在の假定に依つて生じた問題を考へ直して見よう。

(一)、(A)、(一)では一卽ちイデアは部分も性質も名も概念も持たぬ、として明にイデアの無なる事を示してゐる。* が然し(一)、(A)、(二)に於ては εἶναι εἰ でであるならとして前に否定したる所のものを肯定してゐる。前者はプラトンの意味するイデアを規定してゐる。イデアを für sich に見れば――アリストテレス及プラトンの弟子等の考へた樣な性質のものではない。形を持たぬ、時空の制約を受けない、存在しないものである。プラトンは他の對話篇でイデアの存在する事を οὐσία εἰ とか εἶναι εἰ だとか言ふ言葉を用ひた同時に εἶναι εἰ だと言つてゐるが、實に此處では後者に從つてイデアを說明してゐる。然るに後者に於てはプラトンはアリストテレスや自分の弟子等の考へに從つて推論した、卽ち彼等の考へる樣にイデアを存在するもの、形あるものとして見た。その結果はイデアであつた見えたものが多個々

現象となつて了つてイデアではなくなつて了ふ。

*イデアが ἔξις だと言つたとて之を直に無であると考へる事は當を得てゐない。それは只 ἕξις でない事を言ひ表してゐるのみである、即ち時、空の形式に依つて規定されたものでない事を言ひ表してゐるに過ぎない。私が此處に表現方法の不完全さから「イデアの無なる事を示してゐる」と言つたのも、決して言葉通り無ではない。

かくの如く(一)、(A)の(一)、(二)を見るなれば後の(B)も(二)の(A)、(B)も簡單な説明で判明するであらう。即ち(B)の(一)に於ては幾多の問題——特に πέρας と ἄπειρον とのアポリアを——を生ずるとしても、之の推論に於てはイデアと現象との κοινωνία は可能なる事を示してゐる。(B)、(二)はイデアなくしては現象間に Differenzierung がない、從つてそれ等の内に何等の關係もない。

以上に於てイデアの措定は何等矛盾なくして可能である事が證明されたわけであるが、決してプラトンは之だけで滿足せずして、イデアを假定的に否定する事に依つてイデアの措定が必然的である事を示そうとしてゐる。之の事を(二)の(A)、(B)に於てプラトンは試みてゐる。

(二)、(A)、(一)に於ては非存在が無でない事を明に示してゐる。ソヒスト中に述べられてゐる、非存在は卒直な非存在であるを要しないで、關係的に存在である、何等かの風にある、Anderssein の關係に於て存在すると言ふ思想と全く同一である所の思想を言ひ表してゐる。「一は存在しない」。との斷定が建てられた時には、之の命題は眞なるものとして認められなければならぬ。而して一命題が眞である場合には、之に依つて言ひ表されてゐる所のものは妥當するか存在する。此の場合には非存在なる一は存在するか或は一は非存在的かである。かくて非存在の一は自分の非存在の點で存在に關係する(一六二AB)。之の非存在は勿論 Anderssein の樣な意味のものである。之をイデアに當てゝ見るに、イデアは存在しないと言ふ場合にも尙相關的ニテに存在に關係する。かくては Eigensein の關係に於て存在を否定されるが Anderssein の關係に於ては存在する。然して非存在の一は非存在の狀態に於てのそれ自身を考慮すれば靜止してゐるか、不易かである。然しそれが同時に他在に關係してゐる限り非存在と他在の兩狀態に結びつき、或は運動のイデア、更に變化生成のイデアと結びつく。此の所と(一)(A)(一)の附錄の場所とを比

較してその一致に注意しなければならぬ。そこでは肯定、否定の變遷が語られてゐる。(二)、(B)、(二)に於ては非存在の一を絶對的に否定してゐる。イデアの絶對的否定はイデアそのものを Aufheben し、關係的な否定はイデアを只一部分否定するとなして、關係的な立場に於て救つてゐる。消極的假定をもつ辯證法の本來の目的卽ちイデアの措定が必然的であるとの證明は次の二で滿される。

偖て他は物質世界そのものではなくして、Phänomenalität であるとの證明が(二)、(B)、(二)に於て立派になされてゐる。更に之の對話篇はプラトンの認識論と關係があるとの二三の暗示を示してゐる。認識を見る事と比較されてゐる。偖て遠方から物を見る時には不明瞭に見えても、物に近づけばその物の樣子が判然とわかると同樣に、他はそれを δόξα を以つて知覺する人には部分を有する多として現れが、彼が διάνοια の助をかりる時には分つ事の出來ぬ量として現れる。他は單に區別されてゐる樣に見えるが、然し一なくしては存在せぬ。δοξαστόν に於ては或る統一或は吾々に或る個々の個性に於て示す現象が存在する。けれども之の統一は相對的であつて、客觀的妥當性はない。δόξα 或は διάνοια を以つて知られる毎に現象世

界は異つて表象されるから、こゝから現象世界の矛盾した規定が生ずる。非存在のイデアはされば尙或る程度迄存在するものであるが、然し客觀的にではなく只それは主觀的にである。イデアの之の主觀的所有に然し同時にそれの客觀性の要求が横つてゐる、卽ちイデアが存在しない時にはイデアの存在が要求されてゐる。或は之の要求は純認識論的立場から高調される、然し尙 δόξα と διάνοια には νοῦς が入らねばならぬ。イデアがなければ一般に何物もないと云ふ事は之の篇にはその最後になつてはつきりと書かれてゐる。之の種表象は未だかつてあり得なかつた、何者統一がなければ他は多ではなく、多なくしては一の表象は生じ得ないから。イデアの主觀性と客觀性はお互相關的に――全々と言ふのではないが――制約し合ふ。(二)、(B)の(一)と(二)との對立は前者が非存在の一を或る程度に積極的に措定し、後者にそれの否定が全く取入れられてゐる點にある。